
ブラックナイト、参上！

御堂志生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラックナイト、参上！

【Nコード】

N8974H

【作者名】

御堂志生

【あらすじ】

ジョルダン主催「読書の時間」7月投稿作品。テーマ「魔法」/
神様、一生に一度、俺に魔法を使わせてくれ！

「いや、来ないで……お願い」

少女は怯えた瞳で、目の前に立つ『悪魔』を見つめた。

「我らが世界を征服するために、お前は生贄となるのだ」

その『悪魔』は高らかに声を上げて笑う。

「いやあゝゝ。助けてえゝブラックナイトお」

その瞬間、パツと光が差し込んだ！

「そこまでだつ！ 貴様が、悪魔の組織『サターン』のルシファーだな！」

「だ、誰だつ！——まさかっ？」

光の中に黒い影が浮かぶ。

「悪の力を魔法に替えて、魔法の騎士“ブラックナイト”参上！！」

——派手な効果音とともにヒーロー登場！ 一斉に、観客席の子供たちから大歓声が上がった。

なんたつて、一番の盛り上がりどころだからな。

そして、最後はお約束『マジックソード』を抜いて俺は見事、ルシファーを倒した。

「お疲れー。いやあ、良かったよ、木原くん。明日も頑張つてな」
「あ、ども、お疲れ様です」

ここP遊園地では、夏休み期間中、人気特撮番組「魔法の騎士ブラックナイト」のライブショーをやっている。

俺、木原卓巳きはらたくみが主役で「魔法の騎士」ってヤツだ。

まあ、カブリ物してるし、台詞も録音だし……でも、子供たちからキヤーキヤー言われて、写真撮影をねだられたら、俺って人気者？　みたいな勘違いもするわな。

まさか、その勘違いがあんなことになるとは……誰も思わねえって。

「たつくん！　見た？　また来てたよ」

「おっ。超美脚のレモン姫か？」

妙に親しげに俺を「たつくん」と呼ぶのがサターンに毎度襲われる役の牧村葵まきむらあおいだ。

今年、女子大に入ったばかりの十八歳、ショートヘアで目がクリクリっとしてて……まあ、可愛い部類だろう。

「えゝ、コーキくん、やらしゝ。もう、コレだから男って」

「違う違う。俺は葵ちゃん一筋だよん。卓巳のために、チェックしてるんだって」

「んなこと、頼んでねえぞ」

この、テメエの女好きを人のせいにするお調子モンが、さっき俺に倒されてたルシファー、南光輝みなみこうきだ。

俺と同じ二十四歳。しかも、この二人は付き合ってる！

拳げ句にコイツ、

「親父もお袋も公務員だからさ。不況でも給料変わんないんだよねゝ。俺、ひとり息子だし、もうちょっと親のスネかじっちゃおうかなあゝ」

とか言いやるんだぞ。『マジックソード』でぶん殴ってやりたいぜ。

まあ、そういう俺が親にとって良い子かどうかは判んねえが。

俺は、一応アクション俳優を目指して、六年間特撮ヒーローのオーディションを受け続けている。

大学に入った年から研究所にも通い、その他大勢の怪人役くらいなら何度もやった。

でも、一向に芽が出ないんだよなあ。

え？ それって才能がないんじゃない？……判ってる、それ以上は言わんでくれ、頼む。

二十五までやって目処めしが立たなきゃ真面目に就職する、ってのが親との約束だ。

で、今年の終わりに二十五になる俺は、この夏、最後のオーディションにチャレンジした。今は最後の審判を待ってるトコである。

バイトとレッスンで超貧乏生活、六帖、エアコンなしのボロアパートに住むヒーローなんて、子供たちは想像もしてねえよな。

コレで彼女なんか作れるはずがない。いや、もちろん欲しいけど……ヒーローだって男なんだからさ。

レモン姫——コーキが付けた呼び名だ。遊園地のアトラクションに「レモンの木」ってヤツがある。低年齢向きの回転遊具だ。

彼女……三沢香奈みさわかなさんはその担当で、レモンイエローのミニワンピースからスラリと伸びた足が魅力的だった。

背中まで届くロングヘアが、清楚なお嬢様を思わせる。制服が可愛いから、みたいな理由でバイトしてんのかな？ とか妄想してみたり……。

その日、なんと、そのレモン姫が俺に近づいてくるじゃねえか。しかも、真っ赤になって恥ずかしそうに、

「あの……一緒に写真を撮っていただけますか？」

もちろん“ブラックナイト”に、ってことは判ってる。でも、女子大生くらいの彼女が特撮ヒーローとツーショットなんかどうすんだよ!?

大学時代——特撮ヒーロー? やだあ〜と言われ、ふられたくらいだぜ。

直接聞きたかったけど、コレをやってる時は声出し厳禁なんだよな。子供たちのイメージを壊しちまうからさ。
終わったら「レモンの木」にソッコーだ!

俺の脳内が、ヒーローらしからぬ妄想でレモン色になりかけた時、会場に悲鳴が上がった。

えっ? と思って俺は周囲を見回す。したら、列の後方で一人の男が暴れていた——その手に光る物が。

俺は咄嗟に、秋葉原の事件を思い出し、膝がカタカタ震えた。普通そうだろ。

「たっくん、ヤバイよ」

「早く逃げようぜ」

二人にせつつかれ、俺も逃げようとした時だ。

「ブラックナイト、あいつをやっつけて!」

「きつとサターンなんだ。マジックソードで倒してよ!」

チョー待て、出来るわきゃねえだろっ! 危うく、ガキを怒鳴りつけそうになる。

そんな俺に、香奈さんの黄色い制服が目に入った。なんと、刃物男の進路上にいる子供に走り寄り、抱き締めたまま、その場に屈み込んだんだ。

「何やってんだよ! 早く逃げろっ!」

気がつくと、俺は大声で叫びながら、剣を手に彼女に向かって走

っていた。

神様、一生に一度でいい、俺に魔法を使わせてくれ！

俺は『マジックソード』で刃物男の眉間をぶん殴る。プラスチックの剣は粉々に砕け散り……。「よっしゃ！」とガッツポーズをしかけた瞬間、俺の腹に何かが突き刺さる。

……再生の魔法ってなんだったつけ？ 思い出せずに、世界は真っ暗になった。

「本当にありがとうございます。おかげ様で助かりました」
香奈さんは笑顔でそう言った。見舞いに来てくれたんだ、旦那と子供を連れて……。

包丁は腹に五センチも刺さり、全治二ヶ月、まあ、生きてるだけでもラッキーって傷らしい。

でも、ライブショーは中止になった。そして、やっと残った最終審査は……ドクターストップだと。

「最悪」

「あら、最高じゃない。私、ブラックナイトのファンになっちゃった」

担当ナースに慰められてりや世話ねえや。

「アホだと思わね？ 本物のヒーローになろうなんて、さ」

「思わない。なれるよ。きっと！」

「そう……かな？」

「うん！」

二カ月後、ガチヒーローをやった俺が手にしたのは――
某TV局の補欠ヒーロー採用通知と、コスプレ趣味はないけど、
ナースの彼女だった。

一生に一度の魔法は、使えたのか、使えなかったのか、今はまだ
判んねえけど……
いっぺん言ってみたかったな。

「ブラックナイト、参上！」――なんちって。

〈 F i n 〉

（後書き）

御堂です。お読み頂き、ありがとうございます。

パソコン予選3位から携帯決勝5位に落ちてしまった作品です（苦笑）

応援くださった皆様ありがとうございました。

本物のヒーローにしてファンタジーにするか、ちょっと迷いましたが、
でも書き始めると、こうなってしまうました（笑）

一人称「俺」は滅多に書きません。

ヒーロー名は、ジョルダンさんの投稿PN「黒騎士」から来ています。

今月も決勝&予選ともに参加しています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8974h/>

ブラックナイト、参上！

2010年10月28日04時33分発行